2025年度　国際日本文化研究センター共同研究会

＜共同研究の目的＞

国際日本文化研究センターが最も力を入れているのは、共同研究方式の日本文化研究です。日本文化を研究するためには、関係する個別専門分野ごとの成果が着実に積み重ねられなければなりません。と同時に、専門分野の枠組を越えて、研究者が相互に知見を高めあう場が必要になります。こうした共同研究の場は、総体として日本文化理解の促進に大きな役割を果たすものと考えます。このような観点から学際的な共同研究にウエイトを置いています。

また、日文研の共同研究では、日本と異なる知的伝統にたつ海外の研究者との交流をも重視します。異文化からの視点は研究に新しい展望と成果を与え、また研究のあり方に、よい意味での相対比をもたらします。さらに、国際化の時代を迎えた今日、日本文化研究もまた国際化をはかることで、時代の要請に応えることができるでしょう。

もちろん、日文研の共同研究は、単なる研究成果の交換にとどまるものではありません。専門分野及び知的伝統を異にする研究者たちが研究過程を共有しあうことによって生みだされる創造性、これこそが、日文研の共同研究がめざすところの眼目なのです。

（＊奨学生はオブザーバーでの参加となります）

「戦後」と「近代」を超えて−1970 年代日本の国家と社会

＜研究概要＞

「戦後」でひとくくりにされる 1945 年 8 月以降の日本のあゆみのなかで、 大きな転機となった時期を挙げるとすれば、1970 年代初頭であろう。 2 つのニクソン・ショックにともなう戦後国際秩序の動揺、高度経済成 長と戦後処理という国家的目標の喪失は、日本の政治・外交の前提条件 が融解したことを意味していた。相互依存状況の深化と日本の経済力の増大は、日本の政治外交の範囲を飛躍的に拡大し、多元化・多層化させた。これに続くおよそ 10 年をどのように分析し、理解すればよいのか、日本政治外交史研究はまだ答えを見いだせていない。

この共同研究は、1970 年代の日本の政治、経済、外交・安全保障、社会・ 文化の諸分野でどのような変化が進行していたのか、日本にはどのような選択肢があり、なにを選択したのか（しなかったのか）を検討する。「戦後」「近代」を再考し、また冷戦後の「失われた 20 年」を理解する手がかりとして、1970 年代という時代を包括的に考察したい。

＜研究代表者＞

楠　綾子　　国際日本文化研究センター教授

＜本年度研究会開催予定＞

4 回

文化コモンズの生成と変容

＜研究概要＞

1980 年代以後の日本では、新自由主義の台頭によって公共サービス が市場原理に基づく商品に変えられてきた。この変革は、公共性という概念を揺さぶり、社会の基盤となる価値観やシステムに大きな影響を及ぼしている。その波は、文化の領域にも届き、文化施設の運営やサー ビスの内容は、以前とは異なるものになりつつある。文化のソフト面においても、著作権保護範囲の拡大や、ネット空間での行き過ぎた誹謗中傷などによる表現の萎縮が起きている。そうしたなか、文化の公共性と 共的側面を再認識するものとして、文化コモンズという概念が注目されている。文化コモンズは、文化的な活動やその産物には公共性があるとの枠組みのもと、その共有や再創造のプロセスを通じて維持・発展する。 本研究では、文化コモンズはどのように生成し変容するのかを、具体的な事例をもとに考察し、文化コモンズ学の構築に資することを目指す。

＜研究代表者＞

山田　奨治　　国際日本文化研究センター教授

＜本年度研究会開催予定＞

4 回

「知」を編むということ―集輯・編訳・表象にまつわる共創的探究

＜研究概要＞

「知」はいかにして編まれ、変容してきたのだろうか。その結果、いかなる問題が生じどのような可能性が拓かれてきたのか。本共同研究は、 国際的な視野からみた際に浮かび上がる「知」の編纂の実像と可能性について探究する。

「知」を集め、選び、訳し、表すという営みは、時代・文化・事物により 多様な様相や展開を遂げてきた。本共同研究会では、歴史学、文学、芸術、 思想など多岐にわたる分野の研究者の専門知・経験知から、「知」の編纂 を多角的に考察する。日本研究者に限らず、多分野の専門知を結集し比 較的視点を組み込むことで、「編む」という営為の歴史的・文化的・言語 的特性を明らかにするとともに、その力学や政治学、問題系を学際的・ 総合的に検討する。さらに現在（いま）、いかなる「知」が求められているのかを問うことで、未来に向けた「知」の集輯・編訳・表象・伝達の可能 性についても追究したい。

＜研究代表者＞

片岡　真伊　　国際日本文化研究センター准教授

＜本年度研究会開催予定＞

4 回

近代東アジア文化史の再構築Ⅱ―20 世紀の百年間を中心に

＜研究概要＞

周知のとおり、日、中、韓、越の東アジア四ヶ国の文化は、古代、近代を問わず、つねに互いに影響しながら緊密に連動している。古代では、漢字や漢文、また儒教や仏教などがその基盤を成し、そして近代では、いわゆる「西力東漸」という時代の流れの中で、東アジア四ヶ国はさらに相互に経験と教訓を参照し、互いに支え合う形でそれぞれの文化的転換を目指して、一つの全体のもとで漸次に西洋の文化、文明を受容してきた。そのため、19 世紀以降の東アジアの文化の生成と発展からすれば、それを各国の一国内史に切り分けては、けっしてその間の真の歴史的過程を再現することができない。

本共同研究会では、近代日中の文化交渉を中心に、その相互に影響し、交錯するさまざまな歴史的事例の考察を通して、従来の一国史的な歴史叙述の脱構築を図るべく、既成の歴史記述とは異なる視点や方法を提示し、当該地域全体の文化史をあらためて構築してみたい。

＜研究代表者＞

劉　建輝　　国際日本文化研究センター教授

＜本年度研究会開催予定＞

5 回

異文化媒介者たちの比較史

＜研究概要＞

本研究の目的は、異文化圏から到来し文化移入を媒介した人々や集 団に焦点を当て、その活動を比較検討することで、列島社会の文化的特 徴を明らかにすることである。いかなる文化的営為も歴史的条件と無 縁に行なわれることがない以上、異文化媒介者の活動はそれ自体が地域・ 時代的背景の反映になる。本研究では彼らの活動の背景や彼らを介し た異文化移入の様相を見ることで、その時代・地域における国際環境や 社会環境を明らかにすることも目指したい。

＜研究代表者＞

榎本　渉　　国際日本文化研究センター教授

＜本年度研究会開催予定＞

4 回

近代日本における「文人文化」の変容

＜研究概要＞

本共同研究は、「文人」の概念を広く「教養がある人、文雅を愛する人」 として捉え、「文人文化」の近世から近代への連続性に注目しつつ、その 近代における変容の具体像を文学史、美術史、書道史、煎茶文化史、建築 史など、複数分野から明らかにすることを目的とする。　江戸時代の中期以降、詩文書画を愛好する「文人」層の定着とほぼ同 時期に中国から「文人画」が伝来し、独自の発展を経て幕末から明治期 にかけて日本全国で盛んになった。文人文化は漢詩や文人画の作品世 界に留まらず、漢詩文、書画、煎茶などの趣味的会合と文人的趣向が反 映される建築、庭園空間にまで広がりを見せた。同時に、文人画が持つ 趣味性は幅広い社会層に支持され、江戸と上方から地方にまで浸透し ていき、作品の優劣判断と別の次元で、「詩・書・画」を中心とした総合的 芸術活動として日本文化の重要な一翼を担っていた。　ところが、明治以降、西洋文化の流入により、この多様な内容を持つ 文人文化は社会の表舞台から急速に姿が消えたように見えた。これは もちろん歴史記述が新しい事象に傾いた結果であり、文人文化の消失 を意味するものではない。筆や墨の表現は新たな作品世界を創出する ために変容し、漢詩人や書画愛好者の雅集は政治、外交、文化交流の場 として機能しはじめた。「文人文化」を構成する諸要素は新たな時代要 請のなかで変容しつつ、近代以降も存続していた。本共同研究では、近 世から近代への連続性を踏まえたうえで、これら「文人文化」の近代に おける変容の具体像について、東アジアとのつながりを視野に入れて 各分野から総合的に検証していく。

＜研究代表者＞

戦　暁梅　　国際日本文化研究センター教授

＜本年度研究会開催予定＞

3 回